

2012年11月4日 「神の使命に生きる喜び② 愛の業」

先週から、私たちの教会に与えられている5つの使命について学んでいる。覚えてください「礼拝、愛の業、伝道、まじわり、成長（教育）」。私たちはそれぞれ一人一人が、神との一对一の契約関係において、このような使命に応じていく責任があるということを前回お話ししました。そのような使命と責任ということが前面に出てきますと、重荷に覚えてためらいを感じる方もいらっしゃるかもしれません。でも、神が私たちを必要とくださっている、私たちの働きを期待してくださっていると考える時に、なんともいえない誇らしい気持ちが沸き起こってはこないでしょうか。今年の春の特伝でも分かち合った御言葉、ヨハネ15：16「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」この言葉を、私は本当に大切にしています。私たちはイエス様に選ばれたんですね。しかもそれは、世に遣わされていって世を作りかえるという特別な働きをするためのチームの一員として選ばれた。こんな私が選ばれた。私たちはみんな、そうやって選ばれているからここにいるんです。そのことに誇りをもっていたきたいのです。神はこの私たちの教会を用いて、偉大なご計画を進めておられます。誇りをもって、なすべきことに取り組んでいきたいと思うのです。

そういう思いで、5つの使命を確認しているわけですが、今日は二つ目の使命「愛の業」。これは「隣人を自分のように愛しなさい」とのイエス様の命令から引き出すことのできる、明確な使命です。この「隣人愛」ということは聖書の中心と言っていい。ローマ13：8から「互いに愛し合うことのほかに、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があつても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10 愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。」もちろん、神を愛することが当然第一。でも本当に正しく神を愛しているなら必ず隣人も愛することができる。I ヨハネ4：20「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。」目の前にいる隣人を愛することができない人は、神を愛しているだなんて言えない。どれだけ礼拝、祈り、デボーションに熱心でも。

有名な善きサマリア人のたとえ。あるユダヤ人の旅人が強盗に襲われて半殺しになって倒れている。そこに同胞の祭司とレビ人が通りかかるが、この人を見過ごしにして行ってしまふという。祭司というのは神に仕える聖職者です。レビ人というのも同様に、神殿での働きに従事する聖職者。私たちの感覚からしますと、神父と牧師というようなものです。その人が見捨てた。理由はあります。こんな場所でぐずぐずしていたら、自分の身もあぶないです。なにより彼ら聖職者には特別な汚れの戒律がありました。それは死体に触れてはならないというもの。今でもユダヤ教のラビはそう。だから、道で血まみれになっている人を見ても近寄るわけにはいかない。死んでたらいけないから。穢れを受けてしまえば、大切な神への奉仕ができないと彼らは考える。だから見捨てる。この行動というのは、彼らにとっては「神を愛する」ための

最善の選択。でもそれは本当の意味で神を愛してはいないとイエス様は示しているわけです。なぜなら、彼らは隣人を自分のように愛していないから。どれだけ神を愛していると言っても、それは歪んだ愛なのです。

このように、隣人を愛するという事は、キリスト教信仰にとって不可欠の事です。そして、聖書の教えにおいては、隣人を愛するという事はいつも極めて具体的なことでもあります。それは、飢えている人に食べさせ、のどが渇いている人に飲ませ、旅人に宿を貸し、病人を見舞う。そういう具体的な、手を差し伸べる行為、愛の業がすすめられています。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。(Iヨハネ 3:16-18)」

そして、こういう愛の業ということを考える時に、私には真っ先に思い浮かぶ言葉があります。「受けるより与える方が幸いである」という言葉です。使徒言行録の 20 : 35 p 255.

23 節から読んでみます。「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」ここでパウロは、自分自身の生き様を模範として示しながら、教会の長老たちに「与える」という愛の業のすすめを与えています。彼は伝道者として教会に給料を要求することができず、そうするに足る十分な資格があった。しかしそれを求めず、テント職人をしながら自分の食い扶持をかせいだばかりか、共にいた人々をも養ってきたという。だからあなたがたも同じように、経済的に貧しい者、弱い者たちのために自らの富を与えて助けてあげなさい。そして主イエスの言葉を引用するのですね。「受けるよりは与える方が幸いである」、この主イエスの言葉を思い出さないと。

「受けるよりは与える方が幸いである」この主イエスの言葉は、直接このままでは福音書に記されていませんが、イエス様の語られた言葉として、教会の中でずっと大切に語り継がれてきたものだと思う。また同じ内容を示している言葉はいくつも残っている。例えばルカ福音書の 6 章 27 節からのところをご覧ください、113p。ここでは、敵を愛しなさいという、究極の隣人愛を説く文脈の中で、与えることの幸いが語られています。30 節「求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。」そして 35 節「しかしあなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすればたくさんの報いがあり、いと高き方の子になる。」

何も当てにしないで・・・というのが印象的。愛は見返りを計算すれば、愛ではなくなる、

打算になる。だから、まことの愛は相手に何も期待しない。でも、天において報いがあることを信じていい。神が喜んでくださって、ほめてくださる。そのことを喜びとして、何も当てにしないで貸す。「受けるより与えるほうが幸いである」とはそういうことです。そしてそういう教えが、まさに「敵をも愛せよ」という教えと一体のものとして語られている。「敵をも愛せよ」というイエス様の隣人愛の精神を、具体的に言い換えると「受けるより与えるほうが幸いである」となるということもできると思います。

こういう教えに導かれて、教会は歴史を刻んでまいりました。特にこの教えに忠実に生きたのが初代教会です。使徒言行録に示されている教会像に、そんな実践がよく見える。例えば使徒 2：44-47 p 217「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。」ここには、皆が持ち物・食べ物を共有にしたと書いてあるだけで、与えたとは書かれていません。しかし、実際どういうことがなされていたかといえば、裕福な者が生活に困窮している貧しい者たちのために食事を持ち寄ってそれを分かち合ったということがなされている。まさしく「与える」ということがなされていた。

古代の教父のユスティヌスの言葉「・・・生活にゆとりがある人、またささげる意志のある人は、それぞれの望むだけ自由にささげものをします。集められたものは集会を司る人の手元に保管され、彼はこれを用いて、身寄りのない子どもや夫を亡くした女性、病人、貧しい人、囚人、外国人らを援助します。要するに、彼はすべて困窮する人々の手助けをするのです。」

そしてそういう愛の業は、教会共同体の内側にだけ向かうものではなく、外側にもあふれだしていくのです。そういう教会の愛の業が外へと向かっていく動きは、聖書に必ずしも明瞭に示されているわけではありません。しかし、古代教会の実践に、そのような足跡を明瞭に見出すことができます。

たとえばカパドキアの三教父の一人として知られるカイサレイアのバシレイオスは、貧しい病人のための病院を建てました。また、飢饉の際の講話というのが残っているのですが、「人々が共有するものを奪ったり、すべての人のものを独り占めしたりしてはなりません」と勧めたといわれます。そして「困っている人はわたしたちの手を仰ぎます。わたしたちが、困っているときに神の手を仰ぎ見るように」と語って、貧しい者への憐れみの業を勧めていきました。

また、これは水垣渉先生の初期キリスト教とその霊性という本の中で言われていることですが、そこで証言としてあげられていたのは、自分に病気が移ることも顧みずに、疫病患者を見舞って最後まで看病したクリスチャンたちの姿です。

初期教会の拡大・前進を促した大事な要因として、そういう教会の、この世的にはまったく無利益な、愛の活動に対する人々の驚嘆ということがあったと指摘されています。だれかを助けるために、自分自身の命を差し出すようにして、与えることの幸いに生きた、そういう信仰者たちを前にして世の人々が言葉を失ったことは想像に難くありません。色んな反応があった

と思いますが、いずれにしろ人々の心を動かしたのです。「受けるよりは与えるほうが幸いである」この主の言葉に突き動かされた人たちが、そういう感動を生み出したのです。

私たちもまたそのような、与える者の幸いに生きる教会になることができれば、どれほど素晴らしいことかと思えます。何を与えることができるか、それは実際にはとても難しいこと。罪に満ちたこの世では、慎重に色んな知恵を働かせていないと、だまされたり、振り回されて疲れ切ってしまうたりします。その時その時ふさわしい判断を聖霊に祈り求めながらやっていくしかありません。でも与えることの幸いを信じる信仰にどこまでも立ち続けるのです。自分の持っている大切なものを与える。忙しい中で、本当に限られている時間を、誰かの話を聞くために用いるということも立派な与える行為です。私たちが自分のために用いたいと抱え込んでいるものを、誰かを助けるために差し出す、その時私たちは幸いだと主は言われるのです。そのあなたたちこそが、まったく幸福な人だと。天に報いがあるからです。いと高き方、神様が喜んでくださって、よくやった私の子どもたちよと、くしゃくしゃにほめてくださるからです。

最後に、実践のための注意点を二つ

- ① こういう愛の業は、私たちの教会全体に与えられている使命であって、決して一部の人たちだけが負うべき責任ではないということを、改めて確認しましょう。これまでこういう愛の業は、執事的奉仕と言う呼び方で呼ばれ、執事の職務の一つとして数えられてきました。でも執事だけがすることではないのです。あるいは、来年からこの愛の業という使命に対応して社会奉仕委員会を新設することになっています。すでにこの委員会に名乗りをあげてくださっている方が数人いらっしゃって、本当に心強いのですが、皆さんに勘違いしていただきたくないのは、この社会奉仕委員会だけが愛の業をするのではないということです。この委員会の存在は、私たちの教会が向かうべき方向を指し示す指にすぎません。大事なことは、教会全体が執事的になるということです。全体で、愛の業ということを含んでより強く意識することです。
- ② もう一つの注意点は、気負わないでいましょうということです。教会にはこんなこともできるはずだ、こんなこともやらなきゃいけないはずだと気負わないで、聖霊が開いてくださる道を、ゆっくりと進んでいきましょう。これまで折に触れてお話してきましたが、具体的なアイデアは私にも少しはあります。寺小屋のようなことができないか。育児に悩んでいる方のフォローを視野に入れた絵本の読み聞かせ会、カウンセリングもできればいいし、高齢者の方々とのふれあいの時間もあればいい・・・。誤解されたくないのですが、私は何もいろいろとたくさんやっている教会が魅力的だと思っているわけではないのです。でも色んな人が行きかう教会になってほしいとは願っています。それが伝道の大切な足がかりになるはずですし、そういう風に会堂がにぎわうことを神はきっと喜んでくださると

信じています。そのためには、こういった具体的な愛の業を真剣に考えていくことが必要です。でも、それらはすべて、ふさわしい時と賜物が与えられねば、実現することはできません。ですから、これをやらなければと焦る必要はありません。何もできなくてもいいのです。ただ心だけはイエス様の教えにしっかりと向けて、そして小さな叫びに耳を澄ませましょう。私たちの周りで、貧しい方々、悩んでいる方々が発している、声なき叫びに耳を澄ましていきましょう。東北の諸教会が、今地域の方々に対して、本当に大切な愛の業に取り組んでいる。その始まりを聞くと、みんな揃っておっしゃるのが、これをやろうと気負って企画したのではなく、必要とされたことに応えようとしているうちに、自然と導かれるがままに、今のようなかたちになっていったということ。でもそれは、彼らが何も考えていなかったわけではないでしょう。イエス様に心が向いていたから。イエス様ならどうされるのだろうか。そう考えながら、叫びに耳を澄ましていた。そうしたら聖霊が、ふさわしい時にふさわしい導きを与えて、彼らを用いて愛の業を始められたのです。

私たちも同じでありましょう。気負う必要はないのです。むしろ、誰かのために何かをしようと気負う前に、私たちのために、命を与えてくださった方のことを、よく思い起こしましょう。今日もこの後の聖餐式で、よく思い起こしましょう。そうしてイエス様に心に向けていれば、私たちにもまた、聖霊のふさわしい導きを与えられるはずです。